

西村満 NISHIMURA Mitsuru

記憶の風景

西村 満は1970年代から一貫して今日まで北の風景を描き続けてきた(註1)。全てがシリーズと言ってもよいもので、個展においても「北の風景」展と名付けられることが多い。主題には、日本海側である北日本の冬の浜や平原が選ばれ、茫漠たる寒々とした風景は、肌が切れるような冷たい空気と、言いようもない寂しさを観る者に感じさせている。無論、西村が描くのは単に北国の冬の寒さや寂しさを描いた風景ではない。観る者の胸に訴えかけてくるような、どうしようもない寂寥感が詩情にまで昇華した、そんな風景である。これらの作品の多くは、実は、新潟県内の松浜から村上にかけての海岸をモデルとして描いているということだが、作品だけを見る限り、実際にどこを描いた風景なのかを特定することが困難である。新潟に詳しいかどうかということは無関係に、西村の作品では、場所を特定するための要素がごとごとく省略されているからである。例えば、作者の名を一躍知らしめることとなった、第28回安井賞展出品作《秋の野》(No. 4)でもそのことは明白である。役目を終え朽ち果てた漁具小屋と思しき建物が、草むらの中にそのまま置かれている様子が、海景用の極端に横に長いキャンパスに描かれている。観る者は画面を眺めると言うより、作品全体が観る者を包み込み、秋から冬に向かう季節特有の冷たい大気をまず感じ、やがて虚無的な寂寥感に浸ることになる。

しかし、この風景画の中にはそれ以外の具体的な情報は何も無い。特定できないのは「場所」だけではない。季節が「秋」であることは、題名からも枯れた草むらからも明示されているが、いつ頃の風景なのかも判然としないのである。過去なのか未来なのか、極端なことを言えば、戦前の一漁村であっても、30年後の無人村であっても違和感はないと言える。本作をはじめ、作者の作品では「いつか」、「どこか」の「ある」風景が描かれているに過ぎないが逆に言えば、故に根源的で純粋な感覚のみが結晶のように集約され、誰もが、いつかどこかでみたことがあるような、「既視感」のある、言わば「記憶の風景」となって、人々を魅了するのかもしれない。それは、例えば、日本人が『平家物語』や『方丈記』の時代から表現されてきた、「もののあわれ」や「無常観」といったものを、個々の経験値とは別の次元で、時代を超えて誰でも感覚的に理解していることと近いとも言える。

さて、1997年頃まで同様の作品を描いていた作者は、1998年になると突如《廃墟の階段》シリーズを描きはじめる。自らの画風を確立し評価を得ている画家としては異例であろう。主題の変更は必ずしも良い結果を生むとは限らないからだ。周りの人々は驚いたようだが、作家自身は、以前の作品と本シリーズも同じ存在であり、実際、本作にも明確なモデルがあると述べている。佐渡金山の近くにある選鉱場跡の巨大な廃墟の登り口がそれで、「コンクリートの階段は長い年月風雨に曝さ

れてひび割れ、草が生い茂り、ひと気のない建物に、かつての人間の存在の跡や匂いが漂って来る」と感じ、本シリーズも「北の風土の持つ詩情」「失われて行くものへの哀惜」が根底にある点で、同じ流れの中にあると考えているようだ(註2)。しかし、作者の言葉は言葉とし《廃墟の階段》には「北の風景」シリーズにはない要素として「物語」性が明確に表現されているように思われる。「廃墟」主題は西洋美術においては珍しいものではなく、ロマン派の時代には一般的であり、かつて存在した歴史的建造物への敬意や、廃墟の存在により自然の景色の美しさの強調のために描かれ、基本的には「眺めの良い景色」を演出するものだった。しかし、本作の廃墟は、画面全体に収まりきれないほど巨大に描かれ、題名にある階段は生い茂った草が脇から顔を覗かせようと、その存在感を隠しようがない。さらに階段の先はあたかも虚空に向かうごとく上へ上へと向かい続けているのだ。ここにあるのは失ったものに思いを馳せるという寂寥感だけではない。この階段の先には何かがある、この廃墟には何かがあると感じる、好奇心や興味、あるいは不安や恐怖といった、理屈では説明できない反射的な感覚が観る者に沸き起こり、それぞれの記憶の風景から、それぞれの物語が紡ぎ出されるのである。その点で「北の風景」シリーズでは一傍観者にすぎなかった鑑賞者は、本シリーズではそれぞれが主人公となって絵画の中へと入りこむことになるのである。

作者はしばらく《廃墟の階段》シリーズを続けた後、再び「北の風景」に戻り《林へ》(図1)を発表するが、作者の思惑とは別に鑑賞者は独自の物語を付与したらしい(註3)それだけ魅力に溢れていたというべきかもしれない。

(藤田裕彦)

(註1) 作者は同時期に併行して「北の工場」シリーズも書いている。作者にとって最初に安井賞展では同シリーズから、第21回展《煙の街》第23回展《晩秋工場街》を発表している。

(註2) 西村満「作者のことば『新潟の作家100人』図録、新潟県立万代島美術館、2004年、P29.

(註3) 「この絵を観たあるご婦人が、『林の向こうは海なんでしょうね』と聞いた。自分では思っけなかつたことだ。」西村満「作者のことば『新潟の作家100人』図録、新潟県立万代島美術館、2007年、P27.



図1 《林へ》2006